

人間とは何か—— 百科事典による記述

■人間 human being

人、人類とほぼ同義であるが、人文科学的なニュアンスをもって受け取られる。本来は仏教用語として世間と同じ意味に使われたが、人界に住むもの、すなわち人を表す日常語として単数・複数の区別なく用いられるようになった。ヨーロッパ語では、人間に相当する語は男性の意をも含むことが多いが、日本語ではそのようなことはない。このことは、両者の間で人間という認識の内容が異なることを示す。一般には動物および神と区別する語であるが、古今東西にわたり人間は多様なものと理解されている。アイヌ語で「アイヌ」とは人間のことであり、台湾の山地系住民の「タイヤル」もタイヤル語で人間を表す。このような事例は世界各地で見られるが、彼らがかつて広大な地域に散在し、生活習俗を異にする集団同士が接触する機会がきわめて少ない状態に置かれていたことを考えれば、自称民族名すなわち人間ということは当然である。

私たち自身をも含む「人間とは何か」については古来多くの思想家が論じた。そこでは、人間が動物の一種であり、直立二足歩行することは自明の事実とされており、それ以上の特性をもって人間を規定しようとしている。「英知人 Homo sapiens」「工作人 H.faber」「言語人 H.loquens」「政治人 H.politicus」「経済人 H.oeconomicus」「宗教人 H.religiosus」「芸術人 H.artex」「魔術人 H.magicus」「遊戯人 H.ludens」などは、いずれも人間の特性の一面を物語っている。

パスカルは「人間は考える葦(あし)である」として、人間の弱さと思の優越性を説いたが、形而下(けいじか)的には人間はけっしてか弱い存在ではなく、多くの動物たちにとり脅威となっている。今日の自然破壊にみるまでもなく、後期旧石器時代以降、人間は多数の生物種を絶滅、またはそれに近い状態に追い詰めてきた。それというのも、武器や火の使用ばかりでなく、優れた知能に由来する激しい攻撃性の展開の結果であったといえる。このため人間は「食肉類の特性をもつ霊長類」とみなされる。殺人、拷問、戦争などの実例から、人間ほど残忍な動物はいないといわれながらも、他方、ほとんどの動物が利己的にふるまうなかであって、人間は利他的にも行動することが可能で、日常的に他人に尽くし、弱者を扶助愛護する唯一の動物である。多くの動物では老いて生殖能力のないものは死んでいくが、老人は社会の保護により生存し、その知恵と経験をその社会に十分に生かす。そこにヒューマンイズムの根源の姿をみいだすことができる。

自然選択は人間社会においては部分的に作用する。人間は人間のつくった環境のなかで育ち、生きるため、その属性はしばしば自己家畜化で説明されるが、家畜とは異なり、人間は主体性を維持する。人間は技能習得や知能発達のため、その社会特有の形で教育を受ける。したがって生得的な性質のみを維持して成人することはない。人間は一定の価値観をもつよう期待され、その身体も生活も彼が居る社会の文化の影響を受け、着衣を強制される。人間は不自然であることが自然である動物といわれる。

人間は周囲の物体を選んで、これを加工して道具をつくる。道具なしでは人間は生存することができない。人間が人間として生きるためには人間関係の維持がたいせつである。人間の社会は夫婦および家族を基本単位とし、他方いずれの社会も近親相姦(そうかん)を忌避する。また人間の社会は言語をもつことにより、今日のように発展した。また、人間は言語を通して思考することが多い。とくに文字の有無によって人間の社会は未開と文明に分けられてきた。なお人間という語は人柄の意を含む。このことは人間における精神性の重要さを示唆している。

〈香原志勢〉(C)小学館『日本大百科全書』

・下線部に見えるようにこの百科事典の記述の中には「人間観」が極力排除されているように見えます。それはなぜだと思いますか？

文化とは何か—— 百科事典による記述

【現代における〈文化〉の意味】

文化の概念の定義については、哲学、歴史学、社会学、人類学においてさまざまになされてきた。しかし、たとえば、現代の社会学においては、文化とは何かと問うことよりも、文化は社会のなかでいかなる作用や機能を果たしているかが問題とされるようになっていく。アメリカの社会学者ベル Daniel Bell によると、現代の脱工業社会における文化の問題とは、文化が社会構造から乖離(かいり)してきていることである。工場や企業における労働組織や職務配分、地位の配置など産業社会の**社会構造**とされている部分は、機能合理性、最小コストの原則、欲望延期説的な価値を前提としている。これに対し、人々の行動や生活のスタイル、芸術的な感性など〈文化〉については対抗文化(カウンター・カルチャー)の影響のもとで反合理主義的なモダニズムが広まっている。すなわち、産業構造はプロテスタンティズム的禁欲倫理を求めるもののままであるのに、文化は自己表現的、ないし生活享受的なものとなっている。文化は社会構造に働きかけるものであるから、この乖離の長期的な結果を社会学者は問題とするのである。

社会の全体のなかで文化をみると、**文化とは家庭や学校、マス・メディアなど制度の網目を通じて伝達されていくものである**。伝達されるものの内容からいえば、文化には社会に関する価値、規範、神話、象徴、情報などが内包されている。それゆえ、文化は社会のさまざまなレベルの行為者の施策に媒介されるとともに、伝達されるものの内容を媒介としつつ、一社会の人々の間での資源、権力、威信などの配分、すなわち、社会構造に影響をあたえる。それゆえ L. アルチュセールなどのようにこれらの文化伝達の制度をすべて**国家のイデオロギー装置**と考え、支配階級による支配への国民の合意を調達することがその機能だと説明している人々もいる。このような観点から、学校教育とマス・メディアを現代における主要な問題点として重視する研究者も多い。

このような機能主義的な文化の概念とは異なり、構造主義の影響のもとでは、文化は人間の知の記録の集積であり、その知はコードとして構造化されると考えられた。他方、文化をすべて客体的な構造や文化所産にとらえることに対して、文化を何よりも人間が豊かな意味を生きたところの体験であるとする考え方も広まっている。フランスの社会学者モラン Edgar Morin は、文化を構造と体験との間で相互に媒介を行うシステムとして定義している。文化システムは人間のさまざまな体験のうちから、共通なものとすることができ蓄積可能なものをとりだし、おのおのに芸術、文学、哲学、などの作品の形でコード化し、記録し、文化的財として蓄える。これらの文化的財は、その言語や教養などその文化コードを所有する人々によって利用されるのである。かつて体験されたり創作され作品としてコード化されたものは、文化のコードの所有者によって解釈され、想像のうちで体験される。このようにして人間は現実と虚構を分離したり混合したりすることによって、現実に対して効果的なしかたで働きかけることができるし、また想像のなかでの生の享受ができる。社会における人間と人間のコミュニケーションは、このような文化システムを媒介しつつなされるところが大きい。

モランの文化の定義は、現代の文化のうちにみられる教養文化(高級文化)と大衆文化との対立をよく説明するとともに、現代における教養文化の危機をよく説明する。教養文化は高度に知的であり、洗練された趣味という知のコードを所有することにほかならないが、その所有は有利な社会的地位の独占と結びついているから、一般の人々はそこから排除される傾向が強い。だがまた、教養文化の所有者の間で成立する知の共同体においても、教養文化を活性化してきた知のコードの更新において、現代では行詰りをきたしている。

さらに今日、文化は社会的な不平等を説明する**文化資本 capital culturel** の理論において問題とされている。フランスの社会学者ブルディユ Pierre Bourdieu は**社会的な不平等を経済的なそれからではなく、文化資本の配分の不平等から説明している**。すなわち、文化資本とは大学を含めた学校教育体系を通じ教育・形成された人々により獲得される**理論的・技術的な知識**のことである。この知識は中産階級の家庭の有する教養と近いものであることからこの階級の人々には有利であり、学校教育体系は普遍的な知識をあたえるという外観のもとで階級的な選別を行っている、と。文化資本は個人に身体化されたり、卒業資格として制度化された状態で存在する。いずれにせよ経済的資本は、現代の社会のさまざまな回路を通じて文化資本に変形していくし、また文化資本は社会的地位と経済的利益をもたらす、このようにして社会構造の再生産は保障されるのである。近年においては、文化を規範や教養の普遍的存在様式と考えるよりも、その普遍的な外見ゆえに社会的な不平等を再生産するものとみる研究者が増えている。 杉山 光信

平凡社『世界大百科事典』

・ベル、アルチュセール、モラン、ブルデューらがそれぞれ文化をどのようなものとしてとらえているか、読み取れましたか？

精神分析とリビドー —— 百科事典による記述

■精神分析 psychoanalysis

精神分析はオーストリアの精神科医フロイトによって初めて試みられた心理治療の方法のことであるが、今日では一つの心理学の考え方、あるいは研究の方法のことをも意味している。

■治療法としての精神分析——意識と無意識■精神分析のオーソドックスな治療の方法は、患者を長椅子(カウチ)に寝かせて自由連想を試みるように求める。頭に浮かんだことはどんなことでも話すように求める。たとえ治療とは関係なく、道徳的に認められないようなことであっても、思い出したままのことを話すように求めるのである。この意味で精神分析治療は、話をする治療であるといってもよい。しかし、これは、自分の腹のなかにためていたことを話して気が晴れるから治療になるという意味ではない。腹のなかにたまっているものは、日常的な意味でのおしゃべりをしたぐらいで晴れるものではない。自由連想法というのは、おしゃべりでなく、ほんとうの話ができるようにするものである。おしゃべりをすると、ほとんどそのおしゃべりは自己弁護であり、自分の正当性を相手に納得させようとしたり、同情を求めようとしたりするものになってしまう。自分のありのままの姿をことばに出すというより、見せかけの自分を作りあげることになる。この違いを、フロイトは意識と無意識という概念で示している。

■重要な意味をもつ転移■治療法の問題として重要なことは、どうしたら自己弁護でない話をするができるようになるかである。患者は自由連想で自己弁護し、防衛し、抵抗を試みるが、こうした抵抗が分析者によって解釈されるにつれて、特殊な抵抗を試みるようになってくる。これが「転移」とよばれているものである。患者は自分が子供であり、分析者が親であるかのような感情をもつようになり、「自由連想」のなかに親と子の関係が再現されたかのような態度がつくられてくる。転移というのは、幼児期の親子の関係が自由連想の分析状況のなかに移されたという意味にほかならない。このことは別の表現をすれば、患者は日常生活において新しい状況で新しい人と対面していても、その新しさを認識することができず、幼児期に親と子の間でつくりあげた人間関係に従って行動しているということであり、その「親子関係」がさまざまな問題点を含んでいるということである。「三つ子の魂百まで」といわれ、教育問題として、しばしば2歳までとか5歳までとかの家庭教育が重視されるのは、幼児期における親子関係において、後年になっても消すことのできない刻印が押されていることを意味する。しかし、精神分析にとって重要なことは、幼児期の親子関係での経験そのものというより、分析状況のなかに転移されたもの、それが問題であることはいうまでもない。

■エディプス的關係■分析状況で転移された親子関係は、エディプス的關係である。父・母・子の、いわば三角関係である。男の子の場合を例にとつていえば、エディプス的關係は、母親に愛情を抱き、父親に敵意をもつことをいう。男の子は父親を亡きものにし、母親と2人だけの関係を温存しようとする。これはいうまでもなく「近親相姦(そうかん)」の願望で、抑圧される運命にある。父親に対する敵意の報復として、父親から去勢されるのではないかという不安をもつ。この不安をなくすために、男の子は自分を父親と同一視し、エディプス的關係を克服しようとする。

克服されないときに、さまざまな症状がおきてくることになる。転移的關係のなかでは、こうした意味での症状が新しくつくられてくる。その症状の意味を理解することが、治癒につながってくる。こうした精神分析の治療の考え方は、症状そのものを直接になくそうとするものではない。風邪(かぜ)をひいて熱が出たので解熱剤を服用して熱を下げようとする対症療法ではない。症状そのものが問題でなく、こうした症状をつくりだすもとになっているもの、エディプス・コンプレックスとか去勢コンプレックスが問題なのである。

これらのコンプレックスを清算しない限り、対症的に症状をなくしても、それにかわる新しい症状をつくるだけであると考ええる。

■夢の解釈■精神分析において夢の解釈が重要な意義をもつのはこのためである。さらに一步進めて考えるならば、夢と「白昼夢」といわれる空想も類似のものであるから、精神分析を治療としてでなく、心理学の研究の手段として考えるならば、「空想」を研究しようとするものであるといえる。夢は無意識を知るための王道であるといわれるが、夢や空想の研究は、心の無意識過程、すなわち一次過程とよばれるものを明らかにすることができる。これを一般的な心理学の用語でいえば、動機を明らかにしようとしているといつてよい。たとえば犯罪がおこるなら、その動機はなにかがまず第一に問題になるが、無意識の一次過程を明らかにしようとすることは、こうした動機を明らかにしようとするものにほかならない。警察は犯罪者の白状したことをもとにして怨恨(えんこん)であるとか金取りであるとか考えるかもしれないが、分析家は患者の病気の動機はすべて意識されていない性衝動にあるとみなしている。そのため、精神分析は汎(はん)性欲説であるといわれたりすることがある。しかし、精神分析の「性欲」の概念は常識的な意

味での性欲とはかなり異なっている。

■精神分析における性欲■常識では性欲は食欲と同じように生物的本能といってよいほどのものと考えられている。また、性欲は思春期になって初めて現れるものであると考えられている。しかし、フロイトにおいては、性欲は幼児期から現れているものであり、生物的本能とは別個の心理的事実とみなされる。このことは、人間の心理を生物学の知識によって類推しようとするのではなく、心理学固有の概念によって人間の心理を説明しようとするものであるといえる。この意味では、他の心理学の理論のように生物学を援用するものでなく、純粋な心理学をつくろうとするものである。しかし、これは、人間も生物であることを否定するものではない。だから、性欲は、生物学的な食欲に随伴して発現してくる衝動であると考えられる。すなわち、性欲は、幼児が母親から授乳され満足して眠り始めるときのあの満足経験を再現しようとするものであると考えられる。これは、一度うまい食べ物を味わうと、その味を忘れることができなくて、もう一度あのようにうまい物を食べたいと願うのと同じことである。同じようにうまい食べ物を探しても、二度と同じようにうまい物に出くわすことができないように、幼児は満足経験を再現しようとするが、同じような満足を体験することができない。性欲には挫折(ざせつ)が付き物である。

こうした幼児性欲は、口唇期、肛門(こうもん)期を経てさまざまな身体的部位を利用して満足経験を再現しようとするが、男根期(3~6歳ごろ)に至って男根を通して満足を得ようとする。しかし、これは近親相姦の禁止によって妨げられ、満足経験の再現を放棄しなければならなくなり、潜在期(5~11歳ごろ)に至る。そして思春期(12~17歳ごろ)に至って、初めて近親相姦の願望はまったく変容を受け、他人との間に異性愛としての性欲が現れてくる。性欲はもともと母親からの授乳を契機にして発生してきたものであるから、養育者や保護者に性欲が向けられ(男根期)、さらに成長するにつれて、養育者や保護者と類似で、その代理となるような人に向けられる。これに反して、指しゃぶりのような自慰行為にとどまるなら、性欲は自分自身に向けられ、いわゆるナルシズム(自己愛)とよばれる性愛の類型、たとえば同性愛がおきてくる。幼児性欲は、満足を得られるならば、どんな対象であろうと手段として利用する。だから性欲には定型というものはない。なにが正常でなにが異常であるかを定めることができないことは、性生活の報告書の示すとおりである。

フロイトは後期になると、性欲をもっと包括的立場から考えるようになり、**死の衝動(タナトス Thanatos)**に対立する**生の衝動(エロス Eros)**として考えるようになる。

ここでは満足経験の再現というより、衝動の一つの特質とみなされる強迫的に反復しようとする側面が強調され、**満足経験の究極は静謐(せいひつ)、涅槃(ねはん)にある**という考えが示される。いずれにしても、性欲の実際問題は抑圧の運命を担うものと考えられる。性欲は抑圧と切り離して考えることのできないものである。(C)小学館 外林大作

リビドー libido

本来ラテン語で強い〈欲望〉を意味する語。性科学者モル A. Moll は、これを〈性衝動〉の意味、つまりリビドー・セクスアリス *libido sexualis* の意味に限定して用い(1898)、さらに S. フロイトによって精神分析理論の一核心をなすリビドー理論に導入されることになる。フロイトはこの用語をモルから借用したと述べている。フロイトのリビドー概念は彼の生涯の間で変遷した。初期の理論では、リビドーとは性的なエネルギー(その表現は多様な心的・身体的表現をとりうる)であり、〈自己保存本能〉(自我本能)とは対立するものとされていた。しかしのちには、自己保存本能もリビドーとともに作動するものと考えられた。そしてリビドーが自己に向いた状態を〈自我リビドー *ego libido*〉〈自己愛(ナルシズム)〉、それが自己以外の対象に向いた状態を〈対象リビドー *object libido*〉〈対象愛 *object love*〉と呼んだ。フロイトは晩年には、〈エロス〉(しだいに増大する統一体を作り出しこれを維持することがエロスの目的。生の本能)と〈破壊本能〉(死の本能)との二大本能の対立を認め、エロスのエネルギーをリビドーと呼ぶと再定義した。このリビドーに対立するものとして考えられた〈破壊本能〉を指すラテン語はデストルドー *destrudo* である。平凡社 下坂 幸三

・フロイトの語る「エロス」と「タナトス」、この二つの衝動が人間の行為や社会的な活動、文化の中ではどのようにあらわれているのでしょうか。

人格と性格 —— 百科事典による記述

■ 人格 personality

道徳的にすぐれている人を〈人格者〉というように、日本の慣用法においては人格という語は、カント以後のドイツ哲学思想の影響のもとに、理性的存在者として自律的に行為する主体を意味し、その尊厳性を強調する道徳的意味あいを含む語として用いられてきている。しかし、心理学においてパーソナリティ personality の訳語として人格という語を用いる場合、それは道徳的な意味あいや価値的な評価は含まない。それは〈人がら〉あるいは〈性格〉の意味にちかく、たとえば〈パーソナリティとは、個人のなかにあつて、その人の特徴的な行動と考えとを決定するところの、精神身体的体系の動的組織である〉(G. W. オールポート)という代表的な定義にみられるように、各人を特徴づけ、その人独自の行動様式をもたらす精神と身体の内的・統一的システムを意味している。

パーソナリティという語はラテン語のペルソナ persona に由来するといわれ、それは元来、劇中でかぶる〈仮面〉を意味していたが、その後そこで演じられる役割を意味したり、役者自身や人間のもつ性質の総体を意味するものとしても用いられるようになった。一方、日本語で性格と訳されるキャラクター character という語は、もともと〈刻みこまれたもの〉を意味するギリシア語 charakter に由来し、やがて事物の標識、特性を意味するようになったといわれている。語源的なニュアンスからすれば、パーソナリティが社会的関係のなかでの役割や社会的効果の意味合いが強いのに対して、キャラクターは深く刻みこまれた内的特質の意味合いが強いという微妙なちがひがある。心理学において両者を同義に用いる場合もあるが、区別して用いる場合には、人格(パーソナリティ)が知・情・意の全体的な統一性をあらわすのに対して、性格(キャラクター)は、そのうちの情意的な側面をさすのが普通である。

また、性格に似た語として気質 temperament があるが、それは一般に性格の下部構造をなし、個人の情動的反応の特質を規定する遺伝的・生物学的な特性(神経系のタイプなど)をさしている。古代ギリシア以来、有名な〈多血質〉〈胆汁質〉〈黒胆汁質〉〈粘液質〉という気質の4類型があるが、そこには体液の混合の割合がその人の気質を決定するというヒポクラテスに始まる古代ギリシア医学の考え方があった。ちなみに、temperament という語は、〈(液汁の)適正な混合〉を意味するラテン語の temperamentum に由来している。人格はこうした気質を基底として、社会的諸条件のなかで形成されるのであるが、それはたんに社会が期待する役割に適應できる能力や特性を身につけてゆく過程であるだけではない。種々の要素的な能力や特性を全体として統一し、自己を自己たらしめる個性的なあり方を実現してゆく過程でもある。⇒気質 // 性格

高垣 忠一郎

■ 性格 character

人間の特徴的な行動の仕方や考え方を生み出す元になるもので、行動にみられる多様な個体差を説明するために設定された概念。他人と違った自分だけの行動の仕方をもっているという、生まれつきの〈たち〉、品性、人柄のことであるが、現在では通常英語の character の訳語として用いられている。この言葉はギリシア語の charakter に由来し、〈刻印〉または〈刻み込まれたもの〉という意味をもっていたが、転じて標識とか特性を意味するようになった。心理学ではキャラクターをパーソナリティ personality と同義に用いることもある。パーソナリティという語の起源はラテン語のペルソナに由来し、もともとは劇などで使用された仮面を意味していたのが、しだいに変化して俳優の演じる役割を意味するようになり、ついにははっきりした個人的特質、およびそれをもった人の意になった。キャラクターがどちらかという情動的、意志的な面での個人差を強調しているのに対してパーソナリティでは行動の統一性という面が重視され、道徳的な価値判断を含んで人格と訳されることが多い。ただしアメリカでは性格という用語はほとんど使用されておらず、ドイツでも人格という用語が一般化している。

【性格学】 性格ないし人格を研究する学問を性格学 characterology という。その始まりはひじょうに古く、古代ギリシアにさかのぼり、伝統の一方は16世紀のフランスのモラリストたちに継承され、モンテーニュ、パスカル、ラ・ブリュイエールなどの随想録、箴言集などには深い理解と洞察が見られ、文学作品の中にも興味深く描かれている。他方、科学的にはやはりギリシアで2世紀にガレノスが体液を4種類(血液、胆汁、黒胆汁、粘液)に分け、それに従って4気質(多血質、胆汁質、憂鬱(ゆううつ)質、粘液質)の分類を行っている。その後生理学の進歩とともに体液と気質との関連づけは否定されるようになったが、気質の4類型は長く用いられた。

〈性格学〉という名称を最初に用いたのはドイツの哲学者バーンゼン J. Bahnsen であり、1867 年のことである。これは主としてドイツ語圏で発展し、哲学的傾向がみられるのが特徴的である。個々の人間の性格の個人差や性格特性の差異を研究する性格学を差異心理学ともいう(ハイマンス)。性格学が学問として確立したのは類型学からである。その代表的なものとしては、ユング(内向型と外向型)、イェンシュ E. R. Jaensch(統合型と非統合型)、ファーラー G. Pfahler(固執型と流動型)、シュブランガー(理論的人間、経済的人間、審美的人間、社会的人間、政治的人間、宗教的人間の 6 種型)、エーワルト G. Ewald(反応類型)、クレッチマー(体質学的類型)などがあげられる。また精神病質人格に関しては、クレペリンが主として心理学的特性と社会学的関係から神経質、興奮者、軽佻者、ひねくれ者、虚言欺瞞者、反社会者、好争者、衝動者に分けており、K. シュナイダーは主として臨床経験にもとづいて性格異常(精神病質)を〈自分自身が悩むもの〉と〈社会が悩まされるもの〉に分け 10 類型(発揚者、抑鬱者、自信欠乏者、熱狂者、顕示者、気分変動者、爆発者、情性欠如者、意志欠如者、無力者)を列举している。レルシュ P. Lersch は層理論を応用して性格を内部感情的基底と精神生活の上層構造とに二分し、それぞれについて詳細な分析を試みている。哲学的な立場からはクラークスが性格を素材、性向、気性、構築、挙措の属性の 5 側面に分けユニークな理論を展開している。

哲学的色彩の強いドイツ性格学に比べ、アメリカの人格学は社会学、社会心理学、文化人類学などの影響下で発展している。人格についての定義はきわめて多いが、アメリカの心理学者オールポート G. W. Allport の〈人格とは心理・生理的体系としての個人内にある力動的体制であり、その個人の環境に対する独自の適応を規定するものである〉という定義はとくに有名である。これに対しキャッテル R. B. Cattell の定義は〈人格とは人がある状況に置かれたとき、その人がどうするかを予測させるものである〉とする操作的なものである。アイゼンクは因子分析的・統計的方法を用いた人格研究を行っている。

発達段階による性格研究は精神分析に関連するもので、S. フロイトがその基礎を確立している。彼は人格における自我の機能に注目し、自我と衝動体イドと行動の規準の内面化による超自我との葛藤や妥協を力動的にとらえて、人格をその相互関係の過程の上で扱っている。これに続く者として、フロイトの精神分析から現代精神分析への転向を方向づけたライヒ、超自我の早期形成の影響を解明した M. クラインなどがあげられる。また E. H. エリクソンは人格の形成に関する精神分析理論に比較文化論的・対人関係論的見地を導入した。彼は人格の漸成的発達の理論として八つの年代の発達図式を提示した。新フロイト派に属するアメリカの精神医学者 H. S. サリバンの発達理論は認知 3 段階とそれに対応する言語発達段階から構成される。人格の形成を対人関係の場における経験が決定してゆく過程としてとらえ、人格そのものが人間相互関係の状況の比較的持続するパターンであり一種の仮説的存在にすぎないとみている。彼の人格説は、人格を固定化せず臨時的な改変も可能であることを示唆していることでは評価されているが、自我や人格の形成における文化の意義までは言及されていない。

この問題をとりあげ、社会がいかに人格形成に大きな影響を与えているかを強調したのがフロムである。彼の性格形成論の根底には社会的性格なる概念があり、それはあるひとつの社会集団の成員のほとんどがもっている性格構造の本質的な中核をなすもので、その集団特有の基本的経験と生活様式とから発達したものであるという。〈社会的性格は外的な必要を内面化し、ひいては人間のエネルギーをある一定の経済的社会組織の課題に準備させる〉。さらに社会的性格を(1)市場的性格、(2)搾取的性格、(3)受容的性格、(4)貯蓄的性格に分けている。また、ゴットシャルト K. Gottschalt らの、遺伝と環境の性格への影響を考慮して双生児法を採用する研究もある。そのほか筆跡による研究、精神障害者の臨床的研究から出発したものなどその方法は多岐にわたっている。⇒気質 // 人格

飯田 真

(C) 1998-2000 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

・これらの記述の中で「人格」と「性格」その類似点と相違点はどのように説明されていますか。